博士（人間科学）学位論文　概要書

オートポイエーシス的生存可能システムモデルの基礎的研究

An Introduction to Autopoietic Viable System Model

２００３年7月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

土谷　幸久

Tsuchiya, Yukihisa

本稿の目的は、オートポイエーシス的生存可能システムモデルの有効性を示すことである。すなわち、人々は擬似家族的単位と呼ぶべき社会的オートポイエーシス単位を形成することで、成長することができるのである。これは課題や任務に特化したものとして工夫されるべき単位であり、産出されるのは差異化された自己、技能等である。また、これは単位体にはなれず、それ故他者に接続せざるを得ない単位である。そのような相互支持的単位に支えられ参加する自己は、少なくとも当事者、保護者、メタシステムの 3 つの役割を同時に持たさなければならない。

システムはそれ等の相互関係の連鎖で埋まり、その創発機能として生存可能システムモデルという機能の有機構成が可能となり実体システムとして実現されるのである。再帰システムの定理から再帰水準は上下に無限であり、システムⅠの基本単位にも下位水準が存在するはずである。それ故、個々人はモデル的役割配置の単位体化を指向するのである。しかし独立はできず、機能的完備性を追求するのである。それに依って中間構成要素や社会に自らを位置付けるのだが、この単位の場合は個人的な関係性である故、生成と消滅を繰り返しながら重複し自己－他者関係を強化することになる。

このような単位そして単位連鎖を活かす場は、生存可能システム以外にはない。独立単位体や社会的単位体では、連鎖は組織内の一定範囲に限られ社会への接続を阻まれるからである。5 つの大局的機能を持つ生存可能システムモデルはビアによって提唱されたものだが、社会的オートポイエーシス単位から構想するものではなかった。

本稿の立場では、オートポイエーシス論から生存可能システムへの接続は、以下のように説明できる。上述の単位連鎖から構造が実現しているとすると、それ等の集積であるシステムにおいて、合意領域が作られ規範等が設定されることになる。すなわち、単位が現象学的領域を形成し、構成要素たる個人は反応様式の規定化等習俗を受容するのである。よって、擬似家族的単位の重複の中に自己がいると認識する個人は、支持されると同時に必然的に多くの制約を受けることになる。つまり、小さな「社会」でさえ凝集性を維持する方向に規定されているのである。これは、社会システムは本質的に保守的であるというマトゥラーナの見解を裏付けている。

一方、大局的機能の特化は以下のように考えられる。システムのある大局的機能を具体化する中間構成要素の実現においても同様だが、中間構成要素における再帰の下位水準におけるシステムⅠに相当する部分の基本機能が、中間構成要素自体がシステムに対して期待される機能の具現化の基調を作り出すことによって無理なく行なわれる。つまり、単位連鎖は、構成要素の反応様式を凝集性を維持する方向に規定するのであり、システムⅠに相当する部分の基本機能が、中間構成要素の業務に特化した任務を行なっているかのように機能しているのである。すなわち、5 つの大局的機能の実体であるサブシステムの実現は、システムの側から規定される機能を担当するように見えるが、規定されると同時に単位連鎖が創発させた機能の表象でもあるのである。ヘイルの構成要素共同言及性は、このようにして成立する。逆に言えば、期待行動の範囲内に連鎖からの創発は留まるべきなのである。しかし逸脱があるため原理等に整合させる必要があるのである。

斯して社会的オートポイエーシスの集積がシステムの構造を作り出す。それは大局的機能を具現化するように構造化される。すなわち、システムを単位体とするための機能が必要であり、それを生存可能システムモデルと呼び、実現されたシステムを生存可能システムと呼ぶのである。すなわち、生

存可能システムモデルとは、擬似家族的単位の円環の維持を規定するような有機構成ではなく、円環の維持の補助となる有機構成であり、そのような大局的機能の有機構成は、システムの全体を維持する上で反復的に循環しシステムを構造化たらしめ自己自身の作動によって完結させるのである。しかし上述のように、各構成要素は、単位に守られてシステムⅠに相当する部分の基本機能の一部を担うだけである。その累積によって、中間構成要素にサブシステム的機能が創発するのである。つまり単位の累積に守られた期待行動の範囲であり、大局的には個々の人材や技術の輩出とは微小な産出に過ぎない。しかし一度その方向性が示されると、相互産出は組織的となりシステム全体の構造変動を伴うような変化をもたらすことになるのである。

一方独立単位体や社会的単位体では、内集団と区別すべき擬似家族的単位は認められるものの、各部署によって連鎖は断ち切られ単位体への自然な統合は行われてはおらず、社会への接続も望むべくもない。よって、真にオートポイエーシス的であるかということは疑わしいのである。またシステムにおける構成要素や擬似家族的単位の連鎖の自律的作動とは異なり、指示による一方的行動が基調であるため、効率性にも問題が残る。

結論的に、単位連鎖による産出行為と生存可能システムモデルという大局的機能の有機構成そしてそれ等から実現される構造の 3 面から、組織体・社会を捉えることの必要性がわかった。すなわち、オートポイエーシス的生存可能システムのみが、生存可能な社会的システムとしてこれ等が具現することが可能なのである。

また付随的に、①再帰構造化やカップリングを含め外部関係にシステム化を働き掛ける、②擬似家族的単位の連鎖によって次の成長方向を決め産出圧をそれに備える、という特徴を示すこともわかった。